

イスタンブル火災史

昨年度末（3月）現地調査報告および作業進捗状況

田中 傑

◎現地調査報告

1. 目的

2011年3月の調査とその後の分析作業を通じて判明した下記疑問点の解明、情報収集のため

- (1) 火災件数が他のエリアに比較して少なかった「第七の丘」の踏査
- (2) 大火後に実施された基盤整備の状況の踏査
「ディヴァンヨル通りの拡幅」、「アクサライ地区の再開発」など
- (3) 消防能力、消防機材の調査（軍事博物館、海事博物館、消防博物館）

2. 日程

2012年2月23日～3月1日（2日）

3. 経過

(1) 2月24日

午前中に第二の丘の南面（かつて冬期に火災に遭う傾向があった）をのぼり、イエニチェリ（オスマン時代の前近代期における近衛兵、消防隊を兼ね、その後廃止）の旧兵営跡（1826年のクーデター時に大きな火災を起こした）、イエニチェリ浴場跡（建物は現存）を経てイスタンブル消防庁（前身はオスマン期末期に成立）附属博物館へ向かったが、ウェブでの事前情報と異なり、数年前に閉鎖（休館にあらず）され、資料の行方は不明（守衛所の消防隊員による）。

その後、1850年代の大火後に面的な基盤整備が実施されたアクサライ地区を踏査。近代（西洋的）都市計画は街区街路と隣棟間隔とを確保したが、商品が街路上へ張り出していて、交通混雑や火災リスクの要因となっていることを感じた。

ついで、現在はランガと呼ばれるかつての『テオドシウスの湊』を埋め立てたバスターミナル付近に至る。バスターミナル付近は目下、マルマライという海中地下鉄の工事でオープンカット中（日本のJICAと欧州投資銀行が融資）。ターミナルは一般の乗用車にも利用されていたためか、付近には自動車部品関連の小規模な店舗・作業場が集積。ランガの南方にあるイエニマハレと呼ばれるかつてのアルメニア人地区を踏査。廃屋が目立つが、一方で空き地を近隣公園として整備したと思われる箇所も存在。踏査中、住民にゴミを投げつけられる。最後にフロリヤ地区にあるアタチュルク（トルコ共和国大統領）の海浜別荘を見学。

(2) 2月25日

午前中、宿の付近にあるキュチュク・アヤソフィア・モスク、そしてソコルル・メフメト・パシヤ・モスクとそれらの周辺に広がる複合施設跡（宗教施設への各種寄進を基盤に成立した教育・救貧・施療・衛生関連の施設）を踏査。複合施設はその一部が第一次大戦後の世俗化にともなって町家化していた。文献調査によれば、オスマン期、それら複合施設の建蔽率が低かったために延焼が止まったという。町家化によって建て詰まりが進行したはずだが、それによって火災件数がどうなったのかは不明。

第一の丘（トプカプ宮殿が所在）から第二の丘（大宰相官邸=バブアリ、現イスタンブル市長公邸）を経て、第二の丘から第三の丘（イスタンブル大学、バヤズィト塔=火の見やぐら付近）にかけて広がる商業地区に点在するハンと呼ばれる隊商宿を踏査。それらはアーケードのめぐった中庭を有し、当初は階下に厩、階上に宿泊施設があったが、18世紀以降は家内工業に供されるようになり、火災をたびたび発生させた。現在は小売りの店舗や倉庫に利用されているが、商品やハンガーなどがアーケードにまで溢れており、延焼につながったり、避難の際の障碍となることを危惧した。

その後、ガラタ側ベシクタシュ地区にある海事博物館を訪問、事前調査ではイエニチェリに代わって消防活動を担ったと水兵消防隊の装備が展示されているはずであったが、破壊消防用の手斧以外は陳列されていなかった。係員（海軍軍人）も展示物や水兵消防隊に関する知識を有していなかった。

次に、イエニチェリに関する資料を展示している軍事博物館を訪問。ここはハルビイエ（オスマン期の末期、西洋化とともに成立した陸軍士官学校）の建物をコンバージョンしている。イエニリヤリの武器、楽器は多数展示されているが、消防活動については係員（陸軍軍人、日本語を解する）も知らず、展示品もなかった。

(3) 2月26日

午前中、トプカプ門から第七の丘（19世紀時点では複合施設が大部分を占有）を上る。海から一番遠い一帯ではリヤカーに乗せた生魚を売る行商が数名いた。途中からテオドシウスの市壁に沿って南下。19世紀の複合施設は衰微・廃絶しながら、土地の区画は現在にいたる



『第七の丘』、左からシリヴリ・カプ小学校（旧複合施設のマドラサ）とモスク、付属屋



『第七の丘』の畑地、サマトヤのアルメニア人店舗建物、カドウルガの防火壁付き木造家屋

まで維持。複合施設内の非建蔽地は畑や荒地、空地=資材置き場、駐車場、サッカー場などに転用。付近はイスタンブルの中でも最もムスリム色の濃いエリアであったと文献に記されているが、現在も黒衣をまといベールをかけた女性を見かける。世俗化の進んだトルコではやや異質に見える。

その後、サマトヤやクムカプなどマルマラ海側にあるかつてのギリシャ人・アルメニア人地区を踏査。非ムスリムのひとびとはムスリムのひとびとよりも小さな家に住む規則であった文献に記されていたが、午前中に歩いた第七の丘よりも気のせいか密集していたようにみえた。クムカプからカドウルガを經由して帰投、途中の経路周辺は1860年代の火災後に建てられた家屋が多数残存、当時は煉瓦の防火壁を備える条件で木造が許容されていたが、そうした木造住宅が修繕され、販売・賃貸（宿泊施設もある）されている。

(4) 2月27日

イスタンブルでの最終日のため、19世紀の道路拡幅にともなう軒切り、カドウルガ地区の防火壁を備えた木造建築物を撮影、文献資料を書店・古書店で入手。

(5) 2月28日、29日

ノイトラウブリンクというドイツの旧領土から追放されたひとびとが入植して建設した都市をめざし、ミュンヘン経由レーゲンスブルク着、29日、ノイトラウブリンクの踏査の後、同様に追放者たちが建設したノイガブロンツをめざしてカウフボイレンへ移動。



ディーヴァンヨル通り拡幅による軒切りの様子、ノイトラウブリンク教区教会、ノイガブロンツリュューディガー噴水（追放される前の旧地から移設した噴水）

(6) 3月1日

ノイガブロンツを踏査後、イーザー山地博物館（住民が追放される以前の故郷、現チェコ領）にてノイガブロンツ建設過程に関する文献を数冊入手、ミュンヘン空港へ移動、帰国。

4. 収集資料

(1) Resad Ekrem Kocu (1981), *Istanbul Tulumbacilari* (イスタンプルのポンプ隊), Yayinevi 著者の Kocu (レシヤド・エクレム・コチュ) はアタチュルクと衝突してイスタンプル大学を辞職した元歴史学者。文筆家に転業、それ以降の作品は典拠が示されていないことが多いという (川本智史氏ご教示)。

本書は Vasif Hoca (ヴァスフ・ホヂヤ) というオスマン末期にイスタンプル市消防隊にいた人物へのインタビューにもとづく。pp. 144-373 にかけて消防関係者に関する回想。

イエニチェリの消防は略奪のために放火し、自分で消したりした。

市の消防は住民や保険会社にチップをせびる。インタビューのなかには、イエニチェリによる消火活動が禁止されたあとも消火活動につこうとして処罰されたという話も。

→これまで読んだ文献では記述されていない「イエニチェリ→自治体消防」の移行期、「町火消し」の様子が記されている。

巻末にはイスタンプル市における火災履歴のリストがある。1854 年から 1921 年まで 110 件の火災 (被災棟数も) が記載。同時期、これまでの作業が底本とした『Musafa Cezar (2002), *OSMANLI BAŞKENTI İSTANBUL*』が 36 件しか記載していないのに比べて多い。両者ともに記載している火災について、被災棟数が異なる場合、一致する場合、いろいろある。

→Cezar (2002) にもとづく分析を補正するために利用できるか…?

(2) Yavuz Ercan (2001), *Osmanli Yonetiminde Gayrimueslimler* (オスマン帝国支配下の非ムスリム), Turhan Kitabevi

→Rum (ギリシャ人)、Ermeniler (アルメニア人)、Yahudiler (ユダヤ人)、Cingenerler (ジプシー)、Avrupalilar (ヨーロッパ人) の居住区と彼らの宗教施設が記された模式図がある。文献調査をもとに自分で作成した模式図と大差はなかった。

(3) Niyazi Ahmet Banoglu (2008), *Istanbul Cehennemi Tarihte Buyuk Yanginlar* (イスタンプルの地獄 大火の歴史), Kapi

→Cezar (2002) などに記載された火災事例を記述しているが、「年月日」、「被災規模」など定量的な分析に用いることのできる情報があまりない。

◎とりまとめ進捗状況

1. プロシーディングの投稿

(1) 日本建築学会大会 (2012 年 9 月)

火災件数、発生場所・延焼経路の推移を図化、その背景を居住民族=居住密度、土地利用の現況と推移、消防水利の整備に着目して考察 (4 月投稿、9 月発表予定)。

(2) AESOP ヨーロッパ都市計画教育協会年次総会 (2012 年 7 月)

上記に考察、風配図を作成した分析を追加、また、1850 年代以降の建築条例の制定・運用と焼失の有無を考察 (5 月投稿、7 月発表済み)。

2. AESOP ヨーロッパ都市計画教育協会年次総会 (2012 年 7 月) でのプレゼンテーション

7 月 10～15 日に開催される同総会において、西田先生と一緒に研究発表 (於トルコ共和国アンカラ市)

3. 建築学会計画系論文集への投稿準備

1850 年代以降の建築条例の制定・運用と、実現した市街地空間での火災経験を考察予定 (秋?)

以上